シンポジウム・書承から口承へ　～伝承は滅びるか～

新たな語りの現状

櫻井美紀

Ⅰ　古代から現代までの語りの活動

物語を語る文化は、人類が文字を考案する以前から行われ、人々は語ったり聞いたりする行為を楽しんできた。日本で最初に書かれた書物『古事記』は、創世神話と古代の英雄伝説を含み、古代部族の語り伝えの〝口承の物語〟である。

その後、日本における口承の物語は文字で書かれる物語の陰に隠れていたが、中世以後に出現した遊芸の語り手は、楽器をたずさえて全国をまわり、口承の物語を語った。古代に始まった伝承の昔話は、村の家々で〝炉辺の語り〟として、生活の中でも根強く生き残り、大人同士の楽しみとして近代に至るまで語られた。

二十世紀後半、伝承の語り手がヨーロッパにほとんど存在しなくなった時期でも、日本の一九六〇年代の調査では、百話以上のレパートリーを持つ伝承の語り手が、日本中の村々に三百人以上存在すると報告された。

一方、文字に書かれた物語や昔話を覚えて語る〝新しいタイプの語り（Modern Storytelling）〟は、日本では十九世紀の終りに出現している。本に書かれた昔話や物語を口演する語りは児童文学作家の巌谷小波によって一八九八年に始められ、その一派の語り手は〝口演童話家〟と呼ばれ、プロフェッショナルな語り手として、図書館・小学校・幼稚園などで口演した。[1] これが日本のModern Storytellingの始まりであったが、この活動は太平洋戦争中の戦争協力の姿勢により、戦後は語りの活動の中心にはならなかった。

図書館の児童サービスとして行われるストーリーテリングは百年程前に日本に伝えられた。アメリカの公共図書館の児童室で行われる〝ストーリー・アワー〟が、初めて日本の図書館情報誌に紹介されたのは一九〇八年（明治四一年）である。[2] 日本の図書館の児童室で〝ストーリーテリング〟が児童サービスとして位置付けられたのは一九一〇年（明治四三年）からである。[3] 図書館のストーリーテリングは太平洋戦争後、一九六〇年を過ぎてから、東京と大阪の児童図書館員を中心に本格的に学ばれるようになった。図書館員を中心とするストーリーテリング講習会の歴史もすでに三十年となり、ストーリーテリングといえば、「図書館で子どもに語るもの」として、児童図書館員や読書運動に目覚めた母親たちが熱心に学んでいる。図書館の〝ストーリー・アワー〟は、諸外国では児童図書館員が職務として行うが、日本では一九八〇年頃から市民運動としての読書活動が盛んになったため、市民のボランティア活動としてストーリーテリングを学んだ母親たちが

日本各地の図書館のストーリー・アワーに大勢参加している。[4]

II　新たな語り活動の系譜

前述したように、本の内容を覚えてから改めて口語りにする語り方は近代以前にもあったのだが、今回のシンポジュウムで取り上げるのは、近代以後の「意識して、本の中に書かれたものを語る新しい語りの活動」についてである。

最近三十年間の語りの活動のタイプを大きく分けると次の五つのタイプとなる。

① 図書館主導型
② 親子読書・文庫関係活動型
③ 実践と研究の併用型
④ 伝承の民話の継承型・方言の語り・観光の民話
⑤ ①から④までの活動を巻き込むフェスティバル型

各活動の始まりと主な活動団体を記すと、①の図書館主導型の語りは、一九五二年から一九六三年までの間にアメリカの図書館大学で児童奉仕としてのストーリーテリングを学んだ渡辺茂男・山口玲子・間崎ルリ子・松岡享子らが、帰国後、日本の図書館にストーリーテリングを紹介・指導したことに始まっている。一九五三年に「児童図書館研究会」による「お話講習会」が開かれたのを皮切りに、その後設立された「東京子ども図書館」などが一年ないし二年のコースで十二回から二十四回連続の「お話の講習会」を毎年のように開き、現在まで続いている。この三十年間で東京子ども図書館の講習の終了者は二千名を越える。この講習にはのちに述べる文庫活動の母親たちも参加して学んでいる。この図書館型のストーリーテリングの特徴は、本に書かれた文章を暗記するように覚えることで、語った後、その話の出典を紹介する。図書館講座や大学での図書館司書課程でストーリーテリングを学んだ図書館員たちは、図書館の児童奉仕の分野で熱心に語りの活動を取り入れている。

②は子どもの読書に関する市民文化活動の団体が中心になって始められた。「日本親子読書センター」「日本子どもの本研究会」「親子読書地域文庫全国連絡会」などは、いずれも全国組織の文化団体として一九六七年から一九七〇年までに相次いで設立された。それらの団体が子どもたちに本を紹介する方法として〝読み聞かせの運動〟をひろめ、それが文庫活動の中でお話会のレパートリーとして定着し、その延長として〝語り聞かせ〟が始まったものである。（注・文庫には、地域文庫と家庭文庫があり、公共図書館設立と図書館サービスの不足を補う市民運動として生まれた。一九八〇年の全国文庫調査では、日本の各地に四五五五文庫の設置が報告され、公共図書館設置数の約四倍の数であった。）文庫活動を含む市民文化活動では、図書館系統のストーリーテリング講座で学んだ母親たちが中心となり、地域のボランティアと

して語りの活動をしている。

③のタイプには、市民文化活動からストーリーテリングに目覚め、語り専門の全国組織として発足した「語り手たちの会」がある。「語り手たちの会」は読書運動の仲間と文化運動の仲間が手を結び、ともに〝語りの文化〟の向上と普及を目指して一九七七年に発足した。図書館の講座と読書運動の関係者ら、昔話・民俗・子ども文化研究者らがかかわって創立した会で、語りの実践と研究をともに進める文化団体として機能することを心がけている。この会の研究講座と実践講座は一九七九年から連続して行われ、各地の民話の採訪と関連学会への参加、世界のストーリーテリング団体との交流などを通じて語りを広範囲の領域で学び、実践する活動をしている。会員の多くがボランティアとして地域の活動に参加している。

同じく③の活動に入るものとして、一九九二年以後、口承文芸研究者の小澤俊夫が主宰する「昔ばなし大学」の活動が始まった。各地で開催される「昔ばなし大学」の受講者はすでに千名を越え、ここでは小澤の講義により昔話の構造理論と再話を学び、平行して研究をもととした実践を促される。小澤は一九九八年に「昔ばなし研究所」を設立している。

④の文化活動団体として全国組織をもつものは、一九五三年に始まった「民話の会」が母体となり、一九七二年に設立された「日本民話の会」と、一九七四年に設立の「民話と文学の会」である。ともに民話の採訪と記録を進め、民話を愛する仲間の交流の文化活動を進めている。

ここまでに挙げた各文化団体はそれぞれに機関誌を発行し、出版物を通しての普及活動を行っている。

次に、この二十年間の口語りの活動で、参加者を特定せずに社会的に広がったものを述べると、④に関連しては、各地の方言の語りの復活がある。三十年前は、土地の語り手を訪問して聞き書きや採録を行うのは研究者であった。しかし、この二十年間のうちに方言の語り手は一般的にも脚光を浴びるようになった。一九九二年に岩手県遠野市で柳田國男の没後三十年を記念して「世界民話博in遠野」が開かれた折に「昔話村・語り部ホール」が建てられ、一九九三年には山形県南陽市に「夕鶴の里・語り部ホール」が設置された。そこで土地の民話が語られ、観光客を聞き手とする年間を通じての〝民話の語り〟が提供されるようになった。岩手と山形の〝語り部ホール〟が呼び水となって、これと同様の施設は半ば公営、半ば民営の形で全国で作られるようになった。ほぼ同じ頃、観光地の旅館などにもイロリのある部屋が作られ、土地の語り手が土地ことばで民話の語りを披露するようになった。

以後、各県の県民文化祭などには、期間限定の民話館が建てられ、土地の語り手とボランティアの語り手が民話を聞かせるようになった。一応これらの活動を観光の民話の活動と捉えてよいだろう。

⑤は、語り手のフェスティバルである。この十二年間、隔年に連続で開催しているのは、のちに述べる「全日本語りの祭り」で

ある。

Ⅲ　書承の語り手、その語り方の傾向

西暦二〇〇〇年を過ぎた段階で、明治生まれの優れた伝承の語り手の多くの方々が鬼籍に入られた。今、伝承の語り手といわれる方言の語り手は、ほとんどが大正期以後に生まれた方である。私は一九七〇年頃から各地の民話を聞くようになったが、その頃すでに明治生まれの語り手と、大正以後生まれの語り手の微妙な違いが耳に残った。方言の使い方と音楽的要素の違いは、私が戦前に聞いていた土地ことばを基準にして耳で微妙に聞き分けられるものであった。

大正生まれの伝承の語り手の方言の使い方は、青年の頃からラジオを聞いていること、文字を使いこなし、読書の影響もなにかしら受けていることによる。世間が広くなってからの昔話の音楽的要素は微妙に異なってきたといえる。それが三十年前のことであるから、二〇〇〇年以後、伝承は滅びたといわれるのは、一応は頷くことができる。

しかし、〝新たな語り〟がこの三十年で台頭したことが、種々の現象で顕わになってきた。今、問題にしているのは、音の伝達だけであった口承の文学が、〝民話の語り〟〝ストーリーテリング〟の語を使われていても、文字の世界と密接な形で進行していることである。あるいは、文字をそのまま音声化して、物語や昔話を伝達しようとしていることである。それは図書館型の語りの場において堅く守られているように見受けられる。その根拠は〝文学体験としてのストーリーテリング〟ということばから来ている。図書館では話が終わった時点で「そのお話はこの本に入っています」と、語りの担当者が言わなければならないからである。図書館系の語りでは、本を紹介するためと「読書へのいざない」の一手段にストーリーテリングが行われるからである。

伝承の語りを聞きなれている人には、本に書かれた物語や昔話を、テキストのまま丸覚えして語る語り方には異を唱える人が多い。たしかに本の字の通りに〝一字一句たがわず〟に語ろうとするのは大変な努力で、結果的に緊張の高さが語り方全体を堅くしてしまうのである。また、あまりにも〝字の通りに〟覚えすぎると、個性や自由さが失われ、語りの生気が感じられないのが難点であるようだ。

（本学会シンポジュウムの折の、「テキスト通りに語る語り方は、なにかムズムズするところがあって……」というフロアからの発言がそれにあたるだろう。）

私は以前、一九〇九年から一九九八年までに日本で出版されたストーリーテリングの指導書、十三種を調べたことがある。執筆者は岸辺福雄、水田光、下位春吉、松村武雄、久留島武彦、巌谷小波、ユーラリー・ロス、ルース・ソーヤー、小河内芳子、間崎ルリ子、松岡享子、アイリーン・コルウェル、櫻井美紀（以上、出版順）である。どの指導書にも「本の字の通りに暗記するのが

ストーリーテリングである」とは書かれていない。それぞれの執筆者は少しずつ違うニュアンスで「お話を覚えるのは暗記することとは違います」という記述をしている。ロスと松岡と間崎の三人は「一語一語にこだわることはない」ということを根底にしながら「初心者に限り、本の言葉どおりに覚えなさい」となっている。[15]

そこでストーリーテリング講座（語りの講座）の語り理論と指導方法が、現在の日本の語りに大きな影響を及ぼしていることに気づくのである。

一方で、一九九二年以後に作られた各県の〝民話の語り〟の場でも、方言の使える土地の語り手に、新たに〝民話の語り〟の指導をしている。岩手県と山形県の語り部ホールでも、方言を使える四十歳代から六十歳代の人々にテキストを使って〝民話の語り手〟となる養成講座を開いたのであった。

Ⅳ　語り手養成の動向、語り方研究の方向

二〇〇一年に福島県の主催で開かれた「うつくしま未来博」では、須賀川市の山林を切り拓き広い遊園地スタイルのイベント会場がつくられ、そこに民話茶屋が建てられた。その語りのホールにイロリのある舞台が作られ、語り手が次々に登場し、毎日九ステージの「民話の語り」が行われた。「うつくしま未来博」の会期は三箇月あり、そのための県民の語り手は二〇〇人で、そのうちの一七〇人が「福島方言が使える」という資格で応募し、採用され、二年間の語り講座の特訓を受けて養成された新しい語り手であった。その民話茶屋の語りの台本作成と語りの養成講座を受け持った民話研究者の小野和子は、語りの講座では一人に民話三話ずつを割り当て、「いったん文字通りにそっくり覚えてから、今度は覚えたことばを忘れなさい、テキストのことばを忘れてから自分のことばで語りなさい」と指導したとのことであった。私が民話茶屋に聞きに行ったときに、小野の指導をよく聞きこなして自由のある語りで楽しませてくれた人と、まだ文字通りの、暗誦の段階の語りの人とが半々であることが分かった。しかし、このイベントにより一挙に一七〇人の新しい方言の語り手が誕生した。

昔ばなし大学の主宰者小澤俊夫は「口伝え本来の姿をきちんとしておかなければならない。しっかりした話型、構造、様式、イメージの研究に基づく再話を試みる」として現代の語り手を育てている。

語り手たちの会では「語りに新しい風を吹き込むために、語りの伝統を学び、心と技を磨く」として語り手養成講座を続けている。中世以後の語りの伝統から学びながら、語り手の自然な即興のことばが入ることを当然のこととして、文字とテキストに縛られない自由な語りを目指す。そのため、テキストのことばを覚える前のイメージ・レッスンを大事にする。テキストに縛られない自由な体と心を作り、自作のショート・ストーリーの語りを奨励

する。幼児期からの人生の積み重ねが表現される語りの実現に重きをおき、語り手と聞き手の共感をかもし出す魂の交流を目指す。

V　楽しみのためのイベント

前述のⅡ―⑤において、フェスティバル型として位置付けたもののうち、「全日本語りの祭り」をやや詳しく報告する。

このイベントはアメリカの語りの祭り、とくにテネシー州のジョーンズボロで行われる〝ナショナル・ストーリーテリング・フェスティバル〟から学んで始まったものである[6]（＊このNational Storytelling Festivalについては『口承文芸研究』二二号に報告した）。

それらをもとにして、語りに関係のある七つの団体が協力して実行委員会を立ち上げ、第一回の「全日本語りの祭り」を挙行したのは一九九二年の十月であった。その後、日本の各地で地方自治体と共催しながら、隔年に「全日本語りの祭り」を開催している。毎回の語りの祭り参加者は約四百名から千名である。今までの開催地は埼玉県秩父市・山形県南陽市・山口県徳山市・沖縄県宜野湾市・群馬県桐生市・鳥取県境港市で、二〇〇〇年からは「全日本語りネットワーク」が開催母体となっている。全体会と分科会の構成で語りの部屋が十部屋から十五部屋用意され、一泊または二泊でプログラムが進行する。全体会では主だった語り手六人ないし七人の語りを聞き、語りの部屋ではだれでも語り手となり、二日間で二〇〇話以上が語られる。圧巻はアメリカの祭りと同様の野外で行われる「ゴースト・ストーリー」で、二日目の夜に開かれる。桐生市でも境港市でもそれぞれの地元の由緒ある神社の境内をお借りし、五人の語り手が次々に語るゴースト―魂―の話を満喫した[7]。

アメリカの語りの祭りでは一九七三年の創立の時から自分や家族、知人の話を語るストーリーテリングが多いのが特徴である。これを〝パーソナル・ストーリー〟と名づけているが、「全日本語りの祭り」でも自分の人生のエピソードや家族のエピソードを語る語りが毎回取り入れられてきた。自分と家族と知人の人生のエピソードを語ることは大切なストーリーテリングである。

この「全日本語りの祭り」のスローガンは「語る喜びと聞く楽しみを分かち合おう」というものである。ほとんどの参加者が各地で語りの会を開き、ボランティアで語りの活動をしている人であるため、全国の語り仲間の交流の場となっている。しかし、将来は純粋に語りを楽しみに来る一般の語り愛好者が増えることが望ましい。ちなみにテネシー州で行われるストーリーテリング・フェスティバルは毎年一万人以上の語り愛好者が集まる祭りである。

Ⅵ　地域のボランティア活動と語りの役割

日本での口語りの活動の現状報告をあと一つしたい。

この十年間で、市民のボランティアの語り手が学校や保育園・

幼稚園に招かれ、ストーリーテリングをする機会が急速に増えた。文部省（現、文部科学省）が児童と青少年の〝心の教育〟を、地域の活動と連帯して行うよう、全国の小中学校へ要請したからである。この語りボランティア活動も軌道に乗り、全国のアマチュアの語り手は（全国調査はまだないので推定であるが）既に三万人ほどになっているようである。ボランティアの語り手は学校・園のほか、幼児施設、障害のある学童・青少年・成人の施設、高齢者の施設、病院などへ出張訪問し、語りを行っている。語りの内容は昔話が多く、創作の物語・絵本の読み聞かせ・紙芝居・パネルや人形を使うパフォーマンスも加えている。

ボランティアで語りの活動を行っているグループ数も、調査がないので推定であるが全国に千グループほどあり、それらは十人程度のサークルから七～八十人のグループで活動をしている。それらの小グループが前述の〝全国的な活動を持つ大きな組織〟と連絡をして講座で学ぶと同時に、会員となって機関誌を通して交流している。

このような小グループと連絡をとりながら、語りの全国ネットを作ろうとしているのが「全日本語りネットワーク」である。この組織の主な事業は「全日本語りの祭り」を隔年に開催することと、テラブレーションへの参加を呼びかけることである（テラブレーションとは、語りの祝典を意味する造語で、アメリカの語りネットワークの呼びかけにより、世界中の語り手が十一月に語りの集いを開き、語り聞く喜びを分かち合い、語りの輪を広げようというイベント）。全日本語りネットワークの発足は二〇〇二年四月で、まだ日が浅いため会員数も二百四十名と小規模だが、今後、語りの祭りの度に会員を募集して全国的な語りのネットを作る活動を予定している。

これまでに述べたように、日本の語りの大部分は図書館員とアマチュアのボランティア、そして新しく土地の語りを学んだ方言で語る語り手により担われている。これらが書承の語り手である。

しかし、少数ではあるが、耳から聞いただけで語り伝える高齢の〝伝承の語り手〟もおられる。書承の新しい語り手は、テキストの文字にこだわり過ぎぬように、伝承の語りからできるだけ学んで、語りの音声の楽しさを回復しなければならないであろう。

海外の語りの団体との交流も積極的に行い、現代に機能する語りの役割を常に探りつつ活動したいものである。今、国際的な語りの交流から、世界でストーリーテリングの輪が拡がる気運をひしひしと感じる。語ることばで心の平和を保ち、語ることによって世界の平和をつなぐことも望みたい。日本の新たな語りの現状がそれらにつながるものであることを願っている。

【注・参考文献・引用文献】

（注1）巌谷小波『我が五十年』一九二〇年、東亜堂
（注2）『図書館雑誌（2号）』一九〇八年、日本図書館協会
（注3）『図書館雑誌（12号）』一九一一年、日本図書館協会
（注4）明治時代から平成までのおよそ百年間の動向は左の拙稿

にまとめた。

櫻井美紀「口演童話から語り手運動まで」『日本文学史第17巻、口承文学2』に所収、一九九七年、岩波書店

（注5）片岡輝／櫻井美紀『語り―豊饒の世界へ』182～184ページ、一九九八年、萌文社

（注6）Jimmy Neil Smith "HOMESPUN" 1988, Crown Publishers, Inc.

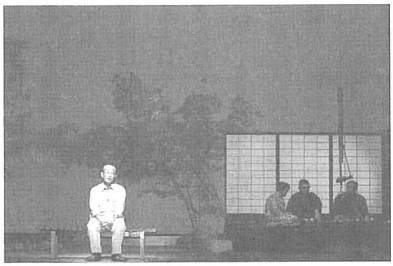
（注7）足立茂美「第六回全日本語りの祭りを終えて」『語りの世界（35号）』に所収、二〇〇二年、語り手たちの会

（さくらい　みき・語り手たちの会）

①

②

③



① 福島県「うつくしま未来博」の「からくり民話茶屋」

② 同、民話茶屋の内部。イロリ端で語る新しい語り手

③ 第六回全日本語りの祭りの全体会。舞台で語る民話の語り手

④ 同、分科会の様子。パーソナル・ストーリーを語る参加者

⑤ 全世界で語りの輪を広げるテラプレーションの一会場（東京）

④

⑤